

人間行動学専攻

社会学

心理学

教育学

地理学



人材育成の目標

人間行動の特性や人間と社会および文化の関係を、とくに社会問題、教育問題や文化摩擦など現代社会が抱える諸問題を視野に入れて、総合的、学際的に捉えることを目的とする。フィールドワークや実験という行動科学の方法論を基礎に、実証的なデータに基づく分析と理解や理論化を重視する。人間行動に関する実証的な研究方法を修得させることによって、現実の社会や人間を客観的に観察する能力を涵養し、研究職のみならず、高度な専門的知識と技術をもった人材を養成する。

社会学専修

人間行動学専攻

専修紹介

大阪公立大学社会学専修の研究上の特色は、現場に密着したフィールドワークの伝統にあります。もちろん、フィールドワークといっても、アンケートに基づく量的手法、各種文献・映像資料を軸とした分析、さらにはライフ・ヒストリーやライフ・ストーリー、インタビューあるいは参与観察にいたる質的手法もすべて含まれます。シカゴ社会学流の用語でいえば、“down-to-earth”が一つの主要な背骨をなしているといえるでしょう。

対象面に関していえば、大阪という日本を代表する大都市の公立大学である点から、都市に関わる諸問題に関する実証的な研究の蓄積が、上記の志向性と関連した社会学専修の一つの特色になっています。もちろん、個々の研究者あるいは院生の関心によって、家族、医療、ジェンダー、メディア、文化、民族、宗教、地域、労働、政策、教育、福祉など実に多様な領域を対象とした社会学的研究が展開されてきていますが、それでもグローバル都市・大阪というフィールドを背景とした研究、社会問題、人と移動への関心と志向性がゆるやかな共通性を示しています。

同時に、上記二点の特色は、社会学全般の領域に対する幅広い視野と理論的視座に裏打ちされていることを強調しておきたいと思えます。何を、いかなる観点から問題とし、それがいかなる研究上・実践上の意義を持つのかを見通す力がなければ、“down-to-earth”は「木を見て森を見ない」誤謬を免れないからです。

教育方針

社会学専修は、人間と社会の相関関係を分析する高度な社会学的専門知識を学ぶことにより、研究者としての資質の向上とともに、高度専門職業人として社会で活躍しうる人材の育成を目指しています。この目的を達成するために、カリキュラムを理論系と調査系の2本柱で総合的に構成しています。「理論なき調査は盲目であり、調査なき理論は死んでいる」という有名な言葉がありますが、理論と調査は互いに他を前提としあう車の両輪のような関係にあり、どちらも大切なことはいまでもありません。

博士前期課程のカリキュラムの内容は理論系・調査系に大別されますが、修士論文の作成に関しては指導教員による定期的演習・指導とならんで、年2回の報告会で論文内容を発表することが義務づけられていて、指導教員以外の教員、また院生からの質疑応答を受けることになっており、集団指導体制をとっています。自分の研究テーマが、社会学という広い枠のなかでどのような位置にあるのかを確認する機会ともなっています。

博士後期課程では、基本的に博士論文の作成に向けての指導が中心になりますが、各年度末に当該年度の進捗状況の報告が課されます。

<https://www.omu.ac.jp/lit/soc/>

専修の特色

教室行事

4月：新年度ガイダンス、都市文化研究センター研究員との交流会、5月：新歓コンパ、6月：博士前期課程大学院入試説明会、7月：中間報告会（集中授業）、8月：オープンキャンパス、11月：研究報告会（集中授業）、大学院入試説明会、12月：『市大社会学』研究会、2月：追出しコンパ、などのように、年間を通したさまざまな教室行事（研究科主催を含む）があります。大学院生を中心とした読書会や研究会も活発に行われています。

出版物

《学術雑誌》『市大社会学』（発行：市大社会学研究会）

社会学教室では、大学院生の研究発表の媒体として、2000年より査読付き論文誌を発行しています。これまで多くの院生が、全国学会誌・専門学会誌に投稿する前のトレーニングの機会として活用し、研究のステップアップにつなげています。

オンラインジャーナル『市大社会学』<https://www.omu.ac.jp/lit/soc-js/>

※大阪市立大学時の創刊のため『市大社会学』という名称を使用しています。

その他の特色

《資格》専門社会調査士

一般社団法人社会調査協会が認定する「専門社会調査士」の資格が取得可能です。研究職を志望する人はもちろん、行政や企業に就職をするさいにも役立ちます。他大学出身者も、大学院の専門科目とあわせて学部授業の単位を別途取得することにより申請することができます。

《研究プロジェクト》

社会学教室では、大阪の社会変化に関する多様な研究と資源の蓄積を活かして研究を進める環境が整備されています。

・学内では、大阪コリアン研究プラットフォーム設置・運営に関わっています。

・学際的な大型調査研究「大阪近隣効果研究プロジェクト」を学内外の研究者と共同で実施しています。[https://project.log.osaka/](https://project.log.osaka/neighbourhood/)

・「和解学の創成～正義ある和解を求めて～」(科学研究費 新学術領域)にも参加しています。
<http://www.prj-wakai.com>

所属教員

石田 佐恵子 (知識社会学、映像社会学、メディア文化研究)

伊地知 紀子 (生活世界の社会学、地域社会学、朝鮮地域研究)

川野 英二 (都市・社会政策の社会学、比較社会学)

平山 亮 (家族社会学、老年社会学、ジェンダー研究)

笹島 秀晃 (都市社会学、文化社会学、歴史社会学)

石田 佐恵子 教授

ISHITA Saeko

専門分野

知識社会学、映像社会学、メディア文化研究

最終学歴 ▶ 筑波大学大学院社会科学部研究科

学位 ▶ 博士(社会学)

【研究内容】

社会の中の知識の共有の問題を考えています。特に映像やテレビ文化、メディア文化に関心があります。最近の研究内容は、「グローバル化時代のテレビ研究の方法と実践」「現代文化における〈有名性〉の力と作用についての研究」「現代文化研究の展開と理論的考察」「テレビ・アーカイブズの公共性」など。有名人、マンガ、韓流ブーム、クイズ文化、ミュージアムなど、幅広いテーマから、国境を越えて拡大する現代メディアの文化について考えています。

個人HP : <https://www.omu.ac.jp/lit/ishita/>

メッセージ・教育方針

社会学的な研究法を身につけ、現代メディアの文化を対象に研究を進めていきたい方、ぜひ一緒に研鑽を積みましょう。自分が探求したい研究テーマについてオリジナリティを持って自律的に考えていくことが出来る学生、特に国際交流や留学に興味のある学生を募集しています。メディア関係の高度専門職業人(社会人入試)、留学生も歓迎します。

【主要業績】

【著書】『基礎ゼミ メディアスタディーズ』(世界思想社, 2020, 共編)
『ポピュラー文化ミュージアム』(ミネルヴァ書房, 2013, 共編)
『ポスト韓流のメディア社会学』(ミネルヴァ書房, 2007, 共編) 『クイズ文化の社会学』(世界思想社, 2003, 共編)
『有名性という文化装置』(勁草書房, 1998)

【論文】「ムービング・イメージと社会 映像社会学の新しい研究課題をめぐって」(『社会学評論』日本社会学会, 237(60-1), 2009)
"Media and Cultural Studies in Japanese Sociology: An Introduction," (*International Journal of Japanese Sociology*, the Japan Sociological Society, vol.11, 2002)

伊地知 紀子 教授

IJICHI Noriko

専門分野

生活世界の社会学、地域社会学、朝鮮地域研究

最終学歴 ▶ 大阪市立大学大学院文学研究科

学位 ▶ 博士(文学)

【研究内容】

私は、大阪に最も多く住んでいる韓国・済州島出身の人びとに出会い、これまで25年間済州島と日本の在住地域でフィールドワークをしてきました。権力の圧制により移動を余儀なくされた人びとが創りだしてきた共同性、それを支える生活世界に関心があります。こうした他地域の異文化人びとについての研究は、実のところ私たちの生活と関わりがあるのです。私たちは、日々の生活のなかで大小様々な事態に翻弄されながらも誰かと共に対処する場面に立ち会います。そんなとき必要な想像／創造力の源泉とは何か?ここに私の関心の種があります。

メッセージ・教育方針

私が担当するのは異文化理解、人びとの移動史、エスニック・コミュニティなどです。これらの内容について、「なぜ?どうして?」という問いを持つことを重要視します。個々のテーマに関する既存文献をこれでもかというくらい読み、関連する場所で生きる人びとに出会ってみることをお勧めします。

【主要業績】

【著書】『和解をめぐる市民運動の取り組み—その意義と課題(和解学叢書4=市民運動)』(明石書店, 2022, 共著)
『街場の日韓論』(晶文社, 2020, 共著)
『消されたマッコリ。—朝鮮・家醸酒(カヤンジュ)文化を今に受け継ぐ』(社会評論社, 2015, 単著)
Rethinking Representations of Asian Women: Changes, Continuity, and Everyday Life, (New York: Palgrave, 2015, 共編著)
『日本人学者가 본 제주인의 삶(日本人学者が見た済州人の生)』(済州大学校耽羅文化研究所, 2013, 単著)

川野 英二 教授

KAWANO Eiji

専門分野

都市・社会政策の社会学、比較社会学

最終学歴 ▶ 大阪大学大学院人間科学研究科

学位 ▶ 博士(人間科学)

【研究内容】

「グローバル化」がローカルな社会生活に及ぼす影響が地域固有の文脈によってどのように異なるのか、またローカルな文脈効果を考慮に入れた貧困と社会問題の実証研究に関心がある。最先端の理論研究や方法論をとりいれながら、統計調査やデータ解析、地域モノグラフなどを用いた研究を行なう。現在は、大阪とパリを主なフィールドとして、海外の大都市の都市社会政策および社会問題の国際比較を実施している。

メッセージ・教育方針

実証研究を行うためには、自分のフィールドをもつ、丁寧なデータの収集と分析、新しい理論や分析手法の吸収、外国語の習得の努力のいずれも欠かすことはできないが、大学院のゼミではとくに調査データの収集と分析の方法に焦点を当てて教育を行なっている。

【主要業績】

【翻訳】『ホームレス救急隊』(花伝社, 2022, 共訳)
『リッチな人々』(花伝社, 2020, 共訳)
『貧困の基本形態』(新泉社, 2016, 共訳)

【著書】『阪神都市圏の研究』(ナカニシヤ出版, 2022, 編著)

【論文】「分断する大都市と近隣関係」(『生活協同組合研究』(533) 23 - 32, 2020)
「現代資本主義と都市空間の再編 : L・ボルタンスキーにおける「社会的なもの」と「空間的なもの」」(iichiko (147) 96 - 109, 2020)

平山 亮 准教授

HIRAYAMA Ryo

専門分野

家族社会学、老年社会学、ジェンダー研究

最終学歴 ▶ オレゴン州立大学大学院人間発達家族研究学科

学位 ▶ Ph.D. (Human Development and Family Studies)

【研究内容】

家族社会学、老年社会学、ジェンダー研究が専門ですが、現在は主に、ケア責任の社会的分有(いわゆるケアの社会化)をテーマとした研究を行っています。家庭におけるケアの主な担い手となった男性や、高齢期の性的マイノリティに焦点を当てた調査を行いながら、ケアの社会化の議論のなかで取りこぼされてきたケアの負担や、そこで暗黙の前提とされてきた家族のあり方を探り出し、私たちが安心して老い衰えるための資源が不均衡に配分された現状をいかに変えていけるかについて考えています。

メッセージ・教育方針

個人的とされる事柄や親密とされる関係に働く権力作用に関心をもつ学生を歓迎します。研究を行う上では、方法や理論についての深い理解はもちろん、ネットワークが大切だと思っています。ディシプリンや国境にとらわれず、自分の立てた問いを掘り下げ、ときに引っくり返すような議論ができる仲間づくりをサポートします。

【主要業績】

【著書】『介護する息子たち—男性性の死とケアのジェンダー分析』(勁草書房, 2017)

【論文】"Counting on women while not counting women's personhood: A critical analysis of the masculine ideal of self-made man in Japan." (*In Routledge Handbook of East Asian Gender Studies* edited by Jieyu Liu and Junko Yamashita, Routledge, 2019)

"Reconsidering long-term care in the end-of-life context in Japan." (*Geriatrics & Gerontology International*, 16 suppl.1, 2016, 共著)

【その他】『「名もなき家事」の、その先へ—“気づき・思案し・調整する”労働のジェンダー不均衡』(けいそうビブリオフィル, 2017-2020, 共著)

専門分野

都市社会学、アートの社会学、歴史社会学

最終学歴 ▶ 東北大学大学院文学研究科

学位 ▶ 博士(文学)

【研究内容】

第二次大戦後の産業社会から脱工業社会という社会構造の変化における都市空間の変動について研究しています。特に近年は、戦後ニューヨークにおける芸術産業の興隆と都市空間の推移について、歴史資料・インタビューデータ・参与観察などの質的な社会調査の手法を用いて研究を行っています。新都市社会学・ジェントリフィケーション論などの都市社会学の視点、制度論的・組織論的な文化社会学の視点、一次資料を重視しつつ社会学理論を応用して事例を分析する歴史社会学、これら三つのパースペクティブを大事にしています。

メッセージ・教育方針

社会学では現象のメカニズムを説明するために簡潔な理論的分析が重視されます。その一方で都市社会学では、確かなデータに基づき厚みをもって事例を記述することも大事だと思っています。議論を通して、理論的視点と事例の記述のバランスのとれた都市社会学的なモノグラフの面白さを伝えていければと考えています。

【主要業績】

【論文】「移動で捉え直すミュージアムの思想」(伊豫谷 登士翁ほか編著『応答する〈移動と場所〉』ハーベスト社, 2019)

「ニューヨーク市 SoHo 地区における芸術家街を契機としたジェントリフィケーション：1965-1971年における画廊の集積過程に着目して」(『社会学評論』, 67(1), 2016)

"From Red Light District to Art District: Creative City Projects in Yokohama's Kogane-cho Neighborhood." (Cities, 33, 2013)



心理学専修

人間行動学専攻

専修紹介

心理学専修では、実験心理学を基礎とした「行動・生理」、「認知」、「社会・文化」の専門分野の教育・研究指導を通して、基礎心理学分野における研究者の養成とともに、現代社会が直面する諸問題に心理学的観点から対処できる高度な専門知識を持った人材の養成を目指しています。そのために、実証科学的方法論を重視した教育・研究体制が組まれており、臨床分野を除くあらゆる心理学諸分野の、基礎から応用にわたる幅広いテーマについて、学び研究することができます。また、多くの実験室を有し、実験設備も充実しています。

教育方針

博士前期課程・博士後期課程のいずれにおいても、希望する研究テーマに合った教員の指導の下で、研究テーマの選定から学術雑誌への論文投稿に至るまで、研究者に求められる態度・知識・技能が習得されるよう、指導が進められます。

博士前期課程では、主に「研究指導」において、研究テーマの設定、実験・調査などの研究方法並びにデータ解析法、さらに論文の構成・形式など、修士論文作成のための知識・技能を習得できるよう、指導がなされます。

博士後期課程では、「論文指導」において、下記の段階を通して、博士論文作成のための指導がなされます。

1年次では、博士論文作成のための研究を行うのに必要な理論、実験・調査などの方法並びにデータ解析法に関する応用的な知識と技能を習得します。各大学院生が、自分の研究課題に即した分野の専門書や学術論文を批判的に検討し、課題に関する研究計画を立案できるよう、指導します。

2年次では、博士論文の研究課題に関連する国内外の論文を検討しながら、研究計画に基づいて実験・調査を実施し、収集したデータの解析を行います。こうした研究遂行の指導を通して、博士論文の完成を目指します。

3年次では、実験・調査データをまとめ、博士論文の構成と論述の仕方などを具体的に指導し、博士論文を完成させます。

博士前期課程・博士後期課程ともに、大学院生以上をメンバーとして月1～2回のペースで開催している「金曜研究会」において研究の進捗状況の報告を行い、報告内容について教員や他の学生達と討論を行うことで、研究を深めていきます。また、指導教員の指導の下、研究成果を国内外の学会で発表し、学会誌に投稿するといった、プロの研究者としての研究活動についても学んでいきます。

専修の特色

教室行事

4月：教室ガイダンス、5月：第1回卒業論文指導会、6月：新入生歓迎コンパ、7月：第2回卒業論文指導会、8月：オープンキャンパス、集中講義、12月：第3回卒業論文指導会、集中講義、2月：修士・卒業論文口頭試問、追出しコンパ、動物供養会

この他、金曜研究会（毎月1～2回）や、海外から招いた研究者による講演やワークショップを行っています。

出版物

『大阪市立大学文学部心理学教室 25年のあゆみ』（1975）

『大阪市立大学文学部心理学教室 40年のあゆみ』（1991）

その他の特色

本学で提供されている単位を取得することにより、日本心理学会が定める「認定心理士」の資格申請に必要な単位をそろえることができます。また、日本心理学諸学会連合が行っている「心理学検定」の受験を薦めています。

<心理学教室が主催・共催する学術イベント>

OMU International Psychology Workshop、OMU International Psychology Seminar、行動数理研究会、人間行動分析研究会

<心理学教室の教員・大学院生が所属する学会>

日本心理学会、日本社会心理学会、日本グループ・ダイナミクス学会、日本感情心理学会、関西心理学会、Society for Personality and Social Psychology、Association for Psychological Science、Asian Association of Social Psychology、日本認知心理学会、日本発達心理学会、日本動物心理学会、日本神経科学学会、日本神経精神薬理学会、日本認知科学会、日本行動分析学会、日本基礎心理学会、Association for Behavior Analysis International (ABAI)、Society for the Quantitative Analyses of Behavior (SQAB)

所属教員

山 祐嗣（認知心理学、推論、思考の潜在性・顕在性、比較文化研究）

川邊 光一（生理心理学、行動神経科学、精神薬理学、高次認知機能・精神疾患の脳内機構）

佐伯 大輔（学習心理学、判断、意思決定、選択行動）

橋本 博文（社会心理学、集団力学、集団内利他行動、心の文化差）

山 祐 嗣 教授		YAMA Hiroshi
専門分野	最終学歴 ▶	京都大学大学院教育学研究科
認知心理学	学 位 ▶	博士（教育学）

〔研究内容〕

人間がどのように推論を行うのかという研究を通して、ヒトの合理性とは何かという問題に取り組んでいます。現在、(1) 潜在的な過程の合理性と顕在的な過程の合理性はどのように区別されるのか、(2) 推論はそれぞれの文化においてどういう意味で合理的か、という問題に興味をもっています。遠い目標として、文化多様性の源泉に辿りたいという望みはありますが、それは途方もないものであるということは自覚しています。

メッセージ・教育方針

卒業論文、修士論文、博士論文の指導において、自由にテーマを選んでもらうのか、私のテーマの範囲内で行ってもらうのか、常にジレンマがあります。始まりは私とは異なるテーマであっても、最終的に同じ問題（たとえば、「ヒトはどういう意味で合理的か」など）を扱うことができれば、理想的ではないかと思っています。現実的なこととして、学術雑誌への投稿は強く奨励しています。

〔主要業績〕

- 〔著書〕"Adapting human thinking and moral reasoning in contemporary society." (IGI Global, 2019, 共編・筆頭)
 「生きにくさ」はどこから来るのか—進化が生んだ二種類の精神システムとグローバル化」（新曜社, 2019）
 「日本人は論理的に考えることが本当に苦手なのか」（新曜社, 2015）
- 〔論文〕"Hindsight bias in judgements of the predictability of flash floods: An experimental study for testimony at a court trial and legal decision making." (*Applied Cognitive Psychology*, 35, 2021 Wiley, 共著・筆頭)
 "Explanations for cultural differences in thinking: Easterners' dialectical thinking and Westerners' linear thinking." (*Journal of Cognitive Psychology*, 31, 487-506, 2019 Taylor & Francis, 共著・筆頭)

川 邊 光 一 教授		KAWABE Kouichi
専門分野	最終学歴 ▶	筑波大学大学院心理学研究科
生理心理学・行動神経科学	学 位 ▶	博士（心理学）

〔研究内容〕

ラットを用いた行動実験により、学習・記憶を中心とした高次認知機能の脳内機構について薬物投与や脳損傷などの手法を用いて研究を進めている。また、統合失調症などの精神疾患の動物モデルを作成し、これらの動物の行動異常を測定して精神疾患モデルとしての妥当性を評価すると同時に、行動異常の原因となる脳内伝達物質系の変化を調べている。これらの研究はヒトにも共通する脳内機構の探求を目指すものである。同時に、これらの高次認知機能や行動異常を測定するための行動課題の開発・評価も行っている。

メッセージ・教育方針

生理心理学、行動神経科学という分野は心理学だけではなく、神経系に関する生物学的知識が必須とされる。専門書や研究論文の精読により、これらの知識を確実に身につけてもらいたい。また特殊な実験技法を習得し、これを正しい手続きに基づいて実施することが適切な実験データを得るために必要となる。これらの知識や技法の理解と習熟を通して、自然科学的な考え方を育ててほしい。

〔主要業績〕

- 〔論文〕"Effects of early postnatal MK-801 treatment on behavioral properties in rats: Differences according to treatment schedule." (*Behavioural Brain Research*, vol. 370, 2019, 共著・筆頭)
 "Effects of chronic forced-swim stress on behavioral properties in rats with neonatal repeated MK-801 treatment." (*Pharmacology, Biochemistry and Behavior*, vol.159, 2017, 単著)
 "Effects of neonatal repeated MK-801 treatment on delayed nonmatching-to-position responses in rats." (*NeuroReport*, vol. 19, 2008, 共著・筆頭)
 "Repeated treatment with N-methyl-D-aspartate antagonists in neonatal, but not adult, rats causes long-term deficits of radial-arm maze learning." (*Brain Research*, vol. 1169, 2007, 共著・筆頭)

佐 伯 大 輔 教授		SAEKI Daisuke
専門分野	最終学歴 ▶	大阪市立大学大学院文学研究科
学習心理学	学 位 ▶	博士（文学）

〔研究内容〕

主に学習心理学の観点から、ヒトや動物の意思決定や選択行動に関する研究を行っています。例えば、「今もらえる1万円」と「6か月後にももらえる2万円」のように、「すぐにももらえる小さい報酬」と「待たされた後にももらえる大きい報酬」の間の選択場面で前者を選ぶことを「衝動性」、後者を選ぶことを「セルフコントロール」といいますが、このような選択を説明するための理論や、選択に影響する要因について研究しています。他に、リスク状況下での選択や、社会場面における協力選択に関する研究も行っています。

メッセージ・教育方針

私の研究している「学習」とは、ヒトや動物の行動が経験によって変化することを指しますが、このことは、環境条件を整えることで、行動をより望ましい方向に変えることができるという見方を提供してくれます。周囲の環境を変えることが難しい場合もありますが、この行動観は、私の研究・教育に役立っていると思います。

〔主要業績〕

- 〔著書〕「セルフ・コントロールの心理学—自己制御の基礎と教育・医療・矯正への応用」（北大路書房, 2017, 共著）
- 〔論文〕"Sharing, discounting, and selfishness: A Japanese-American comparison," (*The Psychological Record*, Vol.61, 2011, 共著)
 "Sensitivity to pre- and post-reinforcer delays in self-control choice." (*Behavioural Processes*, Vol.121, 2015, 共著)
 「成人を対象とした実験におけるオペラングム—タッチパネルとゲームパッドの比較—」（『行動分析学研究』, 第31巻, 2016）

橋 本 博 文 准教授		HASHIMOTO Hirofumi
専門分野	最終学歴 ▶	北海道大学大学院文学研究科
社会心理学	学 位 ▶	博士（文学）

〔研究内容〕

社会のあり方と心のあり方の関係を解き明かすための研究に力を入れています。現在は、主に二つの研究テーマを扱っています。一つは、心の文化差についてです。文化によって心のはたらきが異なるという常識的な理解を超えて、「どのように」、そして「なぜ」心の文化差が示されるのかを調査や実験を通じて深く考えています。もう一つは、人間の協力性・利他性を生み出す心のしくみについてです。私たち人間は、自分のことだけを考えて行動する存在ではなく、他者をも考慮に入れて行動する存在です。そうした“どうしようもなく社会的”な人間の心について、実験を通じて考察しています。

メッセージ・教育方針

研究の何よりの醍醐味は、問うべき問いを自分で設定できることにあると考えています。これが問うべき問いなんだと信じ、その問いに真摯に向き合っている研究者の姿や研究の成果に触れるとき、私は純粋にワクワクさせられます。誰かをワクワクさせるような魅力を備える研究・教育者に私自身一歩でも近づきたいと思っています。そして、私の研究室に所属する学生にも、自分自身で問いを設定し、その問いにきちんと向き合ってほしいと思います。

〔主要業績〕

- 〔論文〕"Time pressure and in-group favoritism in a minimal group paradigm" (*Frontiers in Psychology*, 11:603117, 2020, Frontiers Media S.A., 共著)
 "Social niche construction." (*Current Opinion in Psychology*, 8, 119-124, 2016, Elsevier Ltd., 共著)
 "Two faces of interdependence: Harmony seeking and rejection avoidance." (*Asian Journal of Social Psychology*, 16, 142-151, 2013, Wiley-Blackwell Publishing Ltd., 共著・筆頭)
 「相互協調性の自己維持メカニズム」（『実験社会心理学研究』, 第50巻, 2011）
 "Preferences vs. strategies as explanations for culture-specific behavior." (*Psychological Science*, 19, 579-584, 2008, Sage Publications Inc., 共著)

教育学専修

人間行動学専攻

専修紹介

【総合大学と文学研究科における教育学研究】本専修は、教育方法学、教師教育学といった教育実践そのものを対象にする研究のみならず、その教育実践を支える仕組みを考える教育経営学、そして、これらを原理的、時間的に考究する教育思想・教育史学、空間的に考究する比較教育学という5つの領域を柱としています。教育学は、心理学、社会学、哲学、歴史学、言語学、比較文化学、地域学、行政学、経営学、法学、といった隣接学問のディシプリンの影響を受けながら発展してきましたが、本専修は、文学研究科の中に位置づけられ、しかも全国でも有数規模を誇る研究型総合大学という知的空間において教育学の大学院教育を行います。取得できる学位は、「修士(文学)」「博士(文学)」であり、人文学のディシプリンを踏まえた教育学研究を体現してしております。

【教育研究の特色】本専修の教育研究の特色は、「共同(協働)性:研究者や教育実践現場での教育者たちが共同(協働)しながら研究に取り組むこと」、「実践性(臨床性):教育現場(大学における教員養成も含む)への貢献を目指す研究を行うこと」、「学際性(越境性):教師論、カリキュラム論、学校経営論などさまざまな立場から研究を行うこと」です。特に、「学際性(越境性)」が本専修の最大の特色です。多様な専門領域を背景とする教員集団と触れ合うことで、大学院生たちは自らの専門分野に限定されずに、幅広い視点で教育という事象を見つめ研究することができます。

教育方針

【研究者・高度専門職業人・高度教養人の育成】本専修は、博士前期(修士)課程及び博士後期課程を通して、教育学の分野における先端的知識と方法を身につけ、独創的な研究を自ら行いうる研究者養成を主軸としています。もちろん、博士前期課程を修了し、そこで習得した教育学の専門的知見等を活用することで、今日の社会的な問題等の解決に応えうる高度専門職業人(専修免許状を有する学校教諭など)、また、生涯学習への意欲をもち、人間、社会、文化、言語に対する深い理解を通して、国際社会・地域社会においてさまざまな文化的活動を担うことのできる高度教養人の育成も行っています。

【カリキュラムの特色】より学際的で異分野間交流を促す教育研究の推進をカリキュラムの理念としています。具体的には、教育基礎学(教育思想、教育史)、教育方法学(授業・カリキュラム研究等)、教育経営学(教育行政、学校経営)や教師教育学(教職論、教師の力量形成等)、比較教育学(比較教育史、比較教育文化等)という5つの領域からカリキュラムが構成されています。

【個別及び複数による総合指導体制】課程の修了に際して、博士前期課程の大学院生は修士論文を、博士後期課程の大学院生は課程博士論文を執筆することが求められます。これらの論文指導に対して、日常的な個別指導(正副担当教員)と定期的な合同指導(全教員)を行っています。また、博士前期課程の大学院生は修了に必要な単位数を考慮しながら講義・演習等を受講する必要がある一方で、博士後期課程の大学院生は、講義・演習とは別に設けられた「論文指導」の時間で指導を受けます。

<https://www.omu.ac.jp/lit/edu/>

専修の特色

教室行事

《**修士論文指導**》構想発表会(博士前期1年対象):年2~3回/合同指導会(博士前期2年対象):年2~3回。

《**教育研究フォーラム**》教員・大学院生対象:年2~3回開催。教員や大学院生が、現在取り組んでいる研究テーマに関する発表を主として行います。また、外部から講師を招聘して行うこともあります。

《**教室旅行**》教員・大学院生・学部生対象:10~11月頃に1泊2日で実施。専修・教室の親睦を図ることを目的とした旅行で、教育学に関する学習会がレクリエーションとして実施されます。

出版物

《**『教育学論集』**》年1回、12月刊行。1975(昭和50)年より発刊されてきた教育学専修・教育学教室による学術雑誌です。教員や大学院生が主たる執筆者として数々の研究成果が掲載されてきました。2012(平成24)年12月発行の第38号からは、大阪市立大学教育学会(下記参照)の学会紀要として位置づけられ、内容の充実・発展を経て今日に至ります。

その他の特色

《**大阪公立大学教育学会(仮称)**》2011(平成23)年12月に発足した「大阪市立大学教育学会」以来、本専修が事務局となり活動してきた学会です。年次大会の開催(12月)や機関誌である『教育学論集』の発行(12月)といった活動を中心に行っており、さまざまな分野で活躍されている本専修の修了生の方々と貴重な研究交流の場ともなっています。

《**本専修在学者(修士・博士)の出身校・前職など**》[国内]大阪市立大学(文学部・教育学教室/同・哲学教室/商学部/経済学部/理学部)、愛知教育大学、大阪大学、大阪教育大学大学院、京都教育大学大学院、神戸市外国語大学、滋賀大学大学院、滋賀県立大学、同志社大学大学院、和歌山大学、公立学校教員(小学校、高等学校)、など。[国外]延辺大学(中国)、華東師範大学(中国)、など。

所属教員

添田 晴雄(比較教育学、比較教育文化史)

伊井 義人(教師教育学、教員と地域との連携、教員のキャリア成長に関する研究)

弘田 陽介(教育思想史、ドイツ近代教育論、身体論、児童文化論)

辻野 けんま(教育経営学、教育行政・学校経営論)

島田 希(教育方法学、カリキュラム研究、授業研究)

添田 晴雄 教授		SOEDA Haruo
専門分野	最終学歴 ▶ 大阪市立大学大学院文学研究科	
比較教育学	学位 ▶ 博士（文学）	

〔研究内容〕

比較教育文化史。教育文化は、あまりにも日常化しすぎて当事者にはほとんど意識されないが、教育の在り方や成果に対して決定的に重要な影響力をもつ。そのような日本の教育文化の特質をモノ（学校建築、黒板、学習具など）・コト（行事、時間割など）・言語に注目し、比較の手法を用いて究明している。とくに、教育文化のひとつであるメディアとしての音声言語と文字言語が学習場面や教育場でどのような役割を果たしているかについて比較的、歴史的に研究している。

メッセージ・教育方針

研究方法論としての比較を身につけて欲しい。①たとえば「いじめ」と「bullying」のように、言語による言葉の意味の差異に敏感になること。②比較可能性や比較妥当性を吟味すること。③表面的な教育現象の比較に留まらず、その基盤となる社会的・文化的・歴史的背景を総合的に比較考察することである。

〔主要業績〕

〔著書〕『文字と音声の比較教育文化史研究』（東信堂、2019）

ロイ・ロウ著／山崎洋子・添田晴雄監訳『進歩主義教育の終焉—イングランドの教師はいかに授業づくりの自由を失ったか—』（知泉書館、2013）
社成憲・添田晴雄編『城市中小学校課程開発的实践為課題—中日比較研究—』（華東師範大学出版社、中国語版、2005）

〔論文〕「『体罰』総論—比較研究のために—」（日本比較教育学会『比較教育学研究』第27号、2013）
「共生社会に生きる力を育む特別活動の推進」（『日本特別活動学会紀要』第20号、2012）

伊井 義人 教授		II Yoshihito
専門分野	最終学歴 ▶ 東北大学大学院教育学研究科	
教師教育学	学位 ▶ 博士（教育学）	

〔研究内容〕

学校教育における社会的公正を視点として、教師教育に関する研究をしています。学校教育は、平等に提供される必要がある一方、それぞれ地域や子どもたちの特性を活かしながら実施されなければなりません。そのような過程で、教員は大きな役割を担っています。また教員自身も、様々なライフイベントを経て、教員としての日常や職務を維持しなければいけません。このような学校環境の特性を最大限に活かす教育政策やその実施状況等の分析を踏まえ、特にオーストラリアや日本の遠隔地域に焦点を当てて研究を進めています。

メッセージ・教育方針

学校教育は多くの人が、その経験をもとに語ることができるテーマです。そこでの語りは、友人や教員との楽しくも辛かった思い出など、様々な感情が錯綜しているかもしれません。その一筋縄では整理できない感情をもとに、先行研究や現地調査を通して多様な学校観・教員観を築くことが研究の第一歩です。多くの教育の場や考え方に向き合い、時には日本や現在という時空を飛び越えて、様々な知見を積んで行ってください。

〔主要業績〕

〔著書〕『多様性を活かす教育を考える七つのヒント』（共同文化社、2015、編著）

『フューチャースクール×地域の絆@学びの場』（六耀社、2014、編著）

〔翻訳〕『アメリカ公立学校の社会史：コモンスクールからNCLB法まで』（東信堂、2016、共訳）

〔論文〕「英連邦諸国の学校教育におけるダイバーシティ・マネジメント研究の意義と展望」（『オセアニア教育研究』第19号、2013）
「オーストラリア遠隔地の学校における教員の確保と定着に関する課題：学校長・教員へのインタビューからその実態を探る」（『オセアニア教育研究』第25号、2019、共著）

弘田 陽介 教授		HIROTA Yosuke
専門分野	最終学歴 ▶ 京都大学大学院教育学研究科	
教育思想史	学位 ▶ 博士（教育学）	

〔研究内容〕

教育思想史の研究として、私たちの現在の教育にまで大きな影響を及ぼしている近代の身体観や生命観の生成地点を、18～19世紀のドイツの教育思想に見出すテキスト解釈を行っている。また、並行して、現在の私たちの身体や精神の中に歴史の痕跡を見つけるような研究も行っている。具体的には諸身体技法やアート・遊びを通した子どもとの関わりの経験を、哲学的に位置づけるものである。

メッセージ・教育方針

18世紀後半の代表的哲学者であるI.カントが、当時の思想界に与えた影響は甚大であったが、その後の思想家による200年のカントの語り継ぎが、まさに「カントをカントにする」ものであった。つまり、歴史の一地点の水平的な拡がりを見ることと、その一地点を中心に過去から現代までの系譜を垂直的にたどることの両方を行うことが思想史研究である。私たちの身心に食い込む様々な問題を紐解きながら、歴史と現在を見る目を養っていくようなことを課題としている。

〔主要業績〕

〔著書〕『近代の擬態／擬態の近代：カントというテキスト・身体・人間』（東京大学出版会、2007）

『キッズ・ミート・アート 子どもと出会い、すれ違うアート』（ふくろう出版、2019、共編著）

『いま、子育てはどうする？：感染症・災害・AI時代を親子で生き抜くヒント集35』（彩流社、2021、共著）

〔論文〕「母と子の間で身体が生まれる--ドイツ啓蒙教育学における「身体＝メディア」論序説」（教育哲学会編『教育哲学研究』（101号）、2010）

辻野 けんま 准教授		TSUJINO Kemma
専門分野	最終学歴 ▶ 京都府立大学大学院福祉社会学研究科	
教育経営学	学位 ▶ 修士（福祉社会学）	

〔研究内容〕

学校経営と教育行政に関心をもちながら、主にドイツを対象に研究しています。教育が創造的であるためには、教員や子どもによる主体的な活動が欠かせません（ミクロ・レベル）。しかし、その反面、ひとりひとりの努力だけで教育を創造的なものとするには限界もあります。ここから、学校組織（メゾ・レベル）や教育行政（マクロ・レベル）の役割に期待されることも大きくなります。さらにまた、人間が育つためには、学校「以外」の教育機会に目を向けることも重要です。こうした教育を構成する様々な条件を系統的に理解しようとする教育経営学が、主要な研究関心です。

メッセージ・教育方針

「教育は人なり」とよく言われますが、私たち自身が学校の校風はじめ組織の影響を受けてきたように、人間は「人」から影響を受けるのみではなく組織や制度からも様々な影響を受けるのが現実です。そこで、学生の皆さんが自分自身の問題関心をとりまく全体構造にも目を向けていけるように、一緒に様々な関連研究を読み解いたり実際に調査等をしたりたいと思います。授業でも授業外でも、自由に皆さんと議論を交わせるようになりたいと願っています。

〔主要業績〕

〔著書〕『現代の学校を読み解く—学校の現在地と教育の未来—』（春風社、2016、共著）

『コロナ禍に世界の学校はどう向き合ったのか：子ども・保護者・学校・教育行政に迫る』（東洋館出版社、2022、共編著）

〔論文〕“Professional Responsibility of School Teachers in Public Education: An Analysis of German Educational Administration from a Japanese Perspective”, in: *Journal of the International Society for Teacher Education* (Vol.20, Issue. 1, 2016)

島田 希 准教授

SHIMADA Nozomi

専門分野

教育方法学

最終学歴 ▶ 北陸先端科学技術大学院大学知識科学研究科

学位 ▶ 博士(知識科学)

[研究内容]

授業研究を中心とする教育方法学研究に取り組んでいます。主に、初等中等教育の現場をフィールドとしながら、授業改善、カリキュラム開発、学校改善のプロセスを描き出すこと、それらに影響を及ぼす諸要因を明らかにすることを目指しています。近年では、「専門的な学習共同体」という概念に着目し、今日的な教育課題に対応しうる学校のあり方を探究しています。参与観察、インタビュー、アクション・リサーチなど、質的研究の方法論を用いて、実践の文脈性や個別性をふまえた分析を行うことを重視しています。

メッセージ・教育方針

学校をはじめとするフィールドに真摯に向き合い、そこから得たデータを様々な角度から読み解くための方法論を身につけてもらいたいと思います。そのためには、先行知見を丁寧に紐解き、自分なりの「切り口」を定めることが必要となります。このような研究を進めていく上での、「基本的な構え」を体得してもらえよう、講義や演習を構想しています。

[主要業績]

[著書]『授業研究のフロンティア』(ミネルヴァ書房, 2019, 共著)

『教育工学的アプローチによる教師教育—学び続ける教師を育てる・支える』(ミネルヴァ書房, 2016, 共編著)

[翻訳]『教師と学校のレジリエンス—子どもの学びを支えるチーム力』(北大路書房, 2015, 共訳)

[論文]『学校を基盤としたカリキュラム開発における校長の役割のモデル化—カリキュラム・リーダーシップ論を分析の視点として—』(日本カリキュラム学会編『カリキュラム研究』30, 2021)

育成・交流・発信

文学研究科では、国内外の一流の研究者と共同研究を行うとともに、大学院生や都市文化研究センター(UCRC)研究員等が広く学び、分野を超えて交流し、研究成果を積極的に発信する機会を提供しています。

オープンファカルティ 2020「変わらずそこに文学部」



▲2020年11月にオンラインで開催
大学院入試説明会、院生研究フォーラム、若手プロジェクトによるシンポジウムなど、多彩な企画を配信した

オープンファカルティ 2018「《知》の博覧会 文博」



◀大学院生によるポスター発表



▲UCRC 研究員を中心としたシンポジウム
「若手研究者が考える、都市と文化の〈現在〉」:「イマ・ココから考える「ハーフ」や海外ルーツ」

英語論文作成セミナー
(文学研究科インターナショナルスクール主催)



公開フォーラム
(インターナショナルスクール日常化プログラム)



地理学専修

人間行動学専攻

専修紹介

地理学専修では、都市・経済地理学、文化・社会地理学、政治地理学、地理情報論といった地理学の広範な分野を学ぶことが可能です。研究環境はハード、ソフト面できわめてよく整備されており、少人数教育が行われています。また教員と院生、院生同士、他専修や他大学院との自主的研究会活動も盛んです。当専修ではフィールドワークの力を備えた、現代世界の課題に鋭敏で、総合的な思考力と行動力をもった院生を育成することを目標としています。海外の大学との研究交流も盛んで、留学生も積極的に受け入れています。これまで多くの他大学出身学生を受け入れてきた経験を持ち、包容力ある指導のもとで、すでに30名以上が大学等の研究職に就き、人文地理学における関西の拠点大学院の一つとして研究・教育・社会貢献・国際交流の面で実績を積み重ねてきました。

かつて教室創設者の村松繁樹教授を中心に、富山県の礪波平野散村や五箇山山村の共同調査が実施されて以来、野外調査を基本とする研究方法は、当教室の重要な伝統となっています。また新旧教員や卒業生による都市大阪とその周辺における地理学的研究も蓄積されており、それらの成果は『日本の村落と都市』（1969、ミネルヴァ書房）、『アジアと大阪』（1996、古今書院）などの単行本や、『空間・社会・地理思想』の逐次刊行に示されています。また、海外調査研究の面でも、アジア・中東・アメリカなどで現地調査に携わったスタッフを擁し、COE、GCOE、GP、COC、COC+、頭脳循環、世界展開力強化などのプログラムに関わりを持つ教員も多く、国際的な広がりを持った教育・研究が実施されています。

教育方針

博士前期課程の院生は、演習を主体とした授業を受けつつ、修士論文の執筆に力を注ぎます。博士後期課程になると、学会での口頭発表と学会誌への学術論文の投稿が義務づけられ、国際学会での発表も奨励されます。院生の研究テーマに特に制約はありません。都市研究のほか、農村地域での研究、海外研究など自由に選ぶことができ、政治、社会、文化、歴史など、多様な観点からの研究が行われてきました。前期・後期課程とも正・副2名の指導教員が就き、マンツーマンのきめ細かな指導を心がけています。博士後期課程3年次を終えると、課程博士の学位を請求することができます。本専修では原則としてレフェリーのある学術雑誌に掲載された論文が3編以上あり、400字詰め原稿用紙に換算して300ないし400枚以上の分量のオリジナリティに富んだ内容を持つ論文を、所定の期限までに提出することを条件としています。1999年以降、計21名が博士（文学）の学位を取得し、大学ほか研究機関にて研究者として活躍しています。

<https://www.omu.ac.jp/lit/geo/>

専修の特色

教室行事

教育・研究に関する専修の行事として、教員・大学院学生全員が参加する大学院合同ゼミを月に1回の割合で開催しています。ここでは、博士前期、後期課程の大学院学生による研究発表をもとに、活発な討議が行われます。このほか、6月初旬には教室メンバー全員が参加する春季エクスカッション（日帰り）、2月中旬には卒論修論発表会・予餞会が開催されます。このほかにも、不定期に開催される研究会（地理学コロキウム）や、教員や学生が企画するインフォーマルなエクスカッション、OBOGとの交流が可能な同窓会行事など、様々な活動を行っています。

出版物

『空間・社会・地理思想』（1996年～、年1回刊行）

その他の特色

大学院学生は、人文地理学会を中心に学会発表、論文投稿など、活発に活動しています。学内の都市文化研究センターや都市研究プラザ（現都市科学・防災研究センター）の研究者として活躍する者も多くいます。

所属教員

山崎 孝史（政治地理学、沖縄研究）

祖田 亮次（人文地理学、地域研究）

木村 義成（地理情報科学）

菅野 拓（都市地理学）

山崎孝史 教授	YAMAZAKI Takashi
専門分野	最終学歴 ▶ 米国コロラド大学地理学部大学院
政治地理学・沖縄研究	学位 ▶ Ph.D.

〔研究内容〕

研究領域は人文地理学、特に政治地理学と地政学、そして沖縄研究です。グローバル化や国際情勢の変化が特定の場所で活動する組織や生活する人々にどのような政治的行動を惹起させるのかに注目しています。少し抽象的に言うと、マクロな政治経済的構造がミクロな行為主体の行動とどのような関係を持つかを考察しています。具体的には、国内外での政治地理学の展開を跡付けながら、日本（大阪）や沖縄（沖縄島中北部）を事例として研究しており、特に沖縄では米軍基地をめぐる社会運動、選挙、そして占領・統治史というテーマに取り組んでいます。

〔主要業績〕

〔著書〕『「政治」を地理学する』（ナカニシヤ出版、2022、編著）
『現代地政学事典』（丸善出版、2020、編著）
『政治・空間・場所―政治の地理学にむけて〔改訂版〕』（ナカニシヤ出版、2013）
〔訳書〕『人間の領域性―空間を管理する戦略の理論と歴史』（明石書店、2022、監訳）
〔論文〕"The COVID-19 pandemic and bio/geopolitics in Japan" (Stanley Brunn and Donna Gilbreath eds. COVID-19 and a World of Ad Hoc Geographies. Springer, Switzerland, 2022)
"Maritime Trade and Geopolitics: the Indian Ocean as Japan's Sea Lane" (R.C. Kloosterman, V. Mamadouh and P. Terhorst eds. *Handbook on the Geographies of Globalization*, Edward Elger, UK, 2018)
〔「地政学」から沖縄県政をとらえる〕（地理 63-3, 2018）

祖田 亮次 教授

SODA Ryoji

専門分野

地理学・地域研究

最終学歴 ▶ 京都大学大学院文学研究科

学位 ▶ 博士（文学）

〔研究内容〕

現在までの研究の関心事項は、以下の諸点である。1. 東南アジア少数民族の移動（都市－農村間移動、生態的移動、国際／越境移動）、2. 熱帯地域における土地・資源利用と管理をめぐるポリティクス、3. 日本およびアジアにおける河川流域学と災害文化論。基本的には、人と自然との関係性を社会的・文化的・政治的な観点から考察することを前提としており、古代神話から開発行政、テクノロジーまでをも含みこんだ人間－環境関係論の再構築を目指す。

〔主要業績〕

〔著書〕『資源と生業の地理学』（海青社、2013、共著）
"*Southeast Asian mobility transitions: issues and trends in migration and tourism*" (Department of Geography and Regional Research, University of Vienna, 2014、共著)
"*Antropogenic tropical forests: human -nature interfaces on the plantation frontier*" (Springer, 2020、共編著)
〔論文〕「人文地理学における災害研究の動向」（『地理学論集』90巻2号、2015）
"Biodiversity conservation values of fragmented communally reserved forests, managed by indigenous people, in a human-modified landscape in Borneo" (*PLoS ONE* Vol.12-11, 2017、共著）

メッセージ・教育方針

文献を渉猟して理論的理解を深めるとともに、インテンシブなフィールドワークによって実証的に考察するというアプローチをとっています。国際比較を行うなど、広い視野から対象に接近する姿勢を奨励し、その成果を国際的に発信する指導を心掛けています。政治を地理学の対象から排除せず、一緒にフィールドで考えてみましょう。

詳しくは
http://polgeog.jp/ 参照。

木村 義成 准教授

KIMURA Yoshinari

専門分野

地理情報科学

最終学歴 ▶ 新潟大学大学院医歯学総合研究科

学位 ▶ 博士（学術）

〔研究内容〕

わたしの専門は「地理情報学」です。地理情報と聞くとイメージがつきにくいかもしれません。皆さんが住む世界のあらゆる情報は「地理情報」として扱われており、現在、様々な学問分野で「地理情報」が活用されています。特に、わたしは保健医療分野での「地理情報」の活用を研究課題としています。具体的には、より良い救急医療や災害医療に向けて、医療、地物、人口統計などの様々な地理情報を用いて、地理情報システム（GIS）を用いて可視化や分析を行っています。

〔主要業績〕

〔論文〕"Use of a Geographic Information System (GIS) in the Medical Response to the Fukushima Nuclear Disaster in Japan" (*Prehospital and Disaster Medicine* vol. 27(2), 2012, T Nagata, Y Kimura, and M Ishii)
"Geodemographics profiling of influenza A and B virus infections in community neighborhoods in Japan," (*BMC Infectious Diseases* vol. 11(36), 2011, Yoshinari Kimura, Reiko Saito, et al.)
「不搬送事案が重症・中等症事案の救急対応に与える影響の検討」（『日本臨床救急医学会誌』Vol.23.-4, 2020, 木村義成、山本啓雅、他）
「大阪市における消化出血患者の搬送特性からみた地域グループ」（『史林』Vol.103-1, 2020, 木村義成）

菅野 拓 准教授

SUGANO Taku

専門分野

都市地理学・サードセクター論

最終学歴 ▶ 大阪市立大学大学院文学研究科

学位 ▶ 博士（文学）

〔研究内容〕

都市問題や社会問題と呼ばれる様々な社会的課題がいかに解決されるのかが一貫した関心です。研究者としては、理論構築・実証のフィールドとして、NPO・ソーシャルビジネスなどのサードセクター、彼らと他セクターとの協働、大規模災害被災地での支援活動、貧困問題への対応、政策領域としての地方創生や地域共生社会づくりなどに注目しています。また、NPOや行政の中で実務家として活動することも多く、現場と対話し、地理学のみならず隣接諸科学の知見も横断して、その世界を理解可能なアクションリサーチを頻繁に行っています。

〔主要業績〕

〔著書〕『つながりが生み出すイノベーション―サードセクターと創発する地域―』（ナカニシヤ出版、2020）
『災害対応ガバナンス―被災者支援の混乱を止める―』（ナカニシヤ出版、2021）
〔論文〕「社会問題への対応からみるサードセクターの形態と地域的展開―東日本大震災の復興支援を事例として―」（人文地理 67-5, 2015）
「復興庁の二つの顔―計画行政と再帰的ガバナンス―」吉原直樹・山川充夫・清水亮・松本行真編『東日本大震災と〈自立・支援〉の生活記録』（六花出版、2020）
「職業としてのコーディネーター―越境的協働を促すメカニズムの体現者―」（国際開発研究 30-2, 2021）